

【優秀賞】

タイトル：大切な想い

生徒氏名：藤堂衿菜

私には、「花ちゃん」という九十歳になる曾祖母がいます。

私と花ちゃんは八十歳も年が離れています。私が知らない八十年もの年月で、戦争を体験したり、苦悩や悲しみを乗り越えてきた花ちゃんを私は、とても尊敬しています。

私が生まれた時、花ちゃんはとても喜んでくれました。そして、私が言葉を話し始めた時から、自分の事を「花ちゃん」と呼ぶように私に覚えさせたのです。だから私は今でも「花ちゃん」と呼んでいます。

曾祖父が六十一歳の若さで他界してから三十年間、花ちゃんは、ずっと一人で暮らしていました。私が遊びに行くと、決まって「おかえり」と笑顔で迎えてくれて、帰る時は「行ってらっしゃい」と送りだしてくれます。私は不思議な気持ちになりながらも「ただいま」「いつてきます」と習慣のように言っていました。きっと、いつでも「帰れる場所」がある事を教えてくれていたと思うと、花ちゃんの優しさや、愛情の深さが偉大なものだと思います。

花ちゃんには、子供が一人しかいません。それが私の祖母です。祖母は、花ちゃんを大切にしています。一人暮らしを心配して、何度も祖母の所で一緒に暮らすように説得していました。でも、花ちゃんは「元気なうちは、世話にはならない」という理由で断り続けていたのです。花ちゃんの趣味は、散歩とお花を育てる事です。そして友達がたくさんいて、いつも家の中は、にぎやかで毎日が充実した日々を送っていました。その事を知っていた祖母はあたたかく見守り、花ちゃんの意見を尊重しました。ですが「年寄りを一人にさせて、かわいそうだ」と心なく言う人もいたそうです。

私が小学生の頃、花ちゃんは散歩中に転倒して大腿骨を骨折しました。花ちゃんの家にかかけつけたら、横になったまま動けずにいました。そして救急車を呼び病院へ行きました。入院の準備のために戻った花ちゃんの家の手所には、朝ご飯の残りで豆腐とワカメの味噌汁がありました。私は、それを見た瞬間、涙があふれ「花ちゃん、いつも一人でご飯を食べて、かわいそうだ」と大泣きしました。私には、いつも家族が側にいて団らんがあります。でも、花ちゃんは、いつも一人で淋しくご飯を食べていたと思うと辛くて、悲しくなったのです。その様子を見ていた祖母が「けして、かわいそうな人ではないよ。何をするのも一生懸命で毎日を楽しく過ごしていたよ。ご飯も食べれる事に感謝して、美味しいと食べていたと思うよ。」と話してくれました。その時は、祖母の言葉の意味を理解でき

ませんでした。今になり、わかった事があります。それは、かわいそうと思う事が人を思いやるという事ではなくて、その人のために、何か力を貸してあげる事が大切な事なのだと思います。

その後、大腿骨の骨折は回復しましたが、入院中に認知症だと医師に告げられて、花ちゃんは祖母の住む家へ引越しました。四年間、在宅支援サービスやデイサービスを利用しながら暮らしましたが、口から食事ができなくなり、入退院を繰り返して今は、特別養護老人ホームに入所しています。

花ちゃんは、今までに色々な人にお世話になり、そして色々な人に愛されてきました。周りの人達を幸せにしたり、笑顔にさせたりと花ちゃんは病気になっても変わっていません。そんな花ちゃんを素敵に思いました。

そして私は、介護士さん達の献身的な姿を何度も見てきました。介護士さんが私に「あなたの大好きな人を私達は人生の先輩として敬意を持ってお世話するからね」と言われた事がありました。私は、とても安心しました。きっとあの介護士さんは、花ちゃんの家族では、ないけれど、花ちゃんを理解して一人の人として大切に接してくれてるのだと思います。認知症という病気になっても、花ちゃんが花ちゃんであり続ける事を嬉しく思います。

今、花ちゃんは私の名前も顔も忘れています。でも私は、悲しくはありません。今でも、花ちゃんを通して、たくさんの事を教えてもらい学んでいます。

またいつものように「ただいま」と言って花ちゃんの所へ遊びに行きます。